

アンドロギュノスの裔

渡辺温

青空文庫

——曾て、哲人アビュレの故郷なるマドーラの町に、一人の魔法をよく使う女が住んでいた。彼女は自分が男に想いを懸けた時には、その男の髪の毛を或る草と一緒に、何か呪文を唱えながら、三脚台の上で焼くことに依つて、どんな男をでも、自分の寢床に誘い込むことが出来た。ところが、或る日のこと、彼女は一人の若者を見初めたので、その魔法を用いたのだが、下婢に欺かれて、若者の髪の毛のつもりで、実は居酒屋の店先にあつた羊皮の革袋から取り取つた毛を燃してしまった。すると、夜半に及んで、酒の溢れている革袋が街を横切つて、魔法の家の扉口迄飛んで来たと云うことである。

頃日読みさしのアナトール・フランスの小説の中にこんな話が出ていた。

魔法の術をもつてしても、なお斯の如きままならぬためしがある。

だが、たとえば、アメリカの機械靴の左右を合わせるのに、ほんの寸法だけで左足の堆積まと右足の堆積とから手当り次第に掴み取りして似合の一对とするように、人間が肢を八本もつていたアンドロギュノスの往古むかしに復り度かえい本能からばかりならば、幾千万の男と幾千万の女との適プロバヒリイテイ偶性もまた幾千万と云わなければならぬ。思うに天のアフロバイテを讚える恋の勝負は造化主の意思の外にあるのであろう。神さまは、ただ十文半の黄皮

の短靴の左足は十文半の黄皮の短靴の右足こそふぎ応わしけれ、と思し召すだけに違いない。男と女。男と女。——たった二種類しかない人間が、何故せつない恋に身を焦がしたりしなければならぬのであろうか？

*

Y君が片かたおもい恋をした。

相手は比の頃、ベルクナルにも劣るまいと評判の高い活動写真の悲劇女優である。

それに引きかえてY君は、第三十騎兵連隊勤務の一等安手の下士官の身分に過ぎないのだから、この恋に到底望みのなさそうなことを杞慮する程の己惚れさえも持ち合わせない。はじめは当り前のファンで、週末の休み日毎に、たとい二度三度見直す同じ狂言であろうとも、きまつて彼女の出る映画ばかりを漁っている中に、だんだん彼女の何時も深いかな愁しみに隈どられた面輪が、頭の中のスクリーンに大写しのようにいっばいに映ったまま消えなくなつたのである。

こんな身の程を弁えぬ恋をしてしまったことは、容易ならぬ不幸せだ——とY君は考えた。一生、ひそかに恋わたっているだけのことで、それでもいいのだろうか？

だが、それ以上、Y君にはどう思案するすべもなかった。

さて、偶たまたま、或る休み日に、彼女の映画が市内の何処の活動小屋にも掛っていないからである。そこで、Y君は諦めがたく、夕景頃から、彼女の住居のあたりを散歩してみた。気持に誘われた。Y君は、俳優名鑑に依つて、夙に彼女の身元位は諳んじていたのだから。悲劇女優の住居は、公園の松林の中の大きな池の辺にあつた。窓に董色の日覆を取り付けた簡素な木造の二階家が、丈の高い松の木立ちと一緒に、池の面に姿を映していた。Y君は水際のベンチに腰を下すと、長いサーベルの柄頭に両手を重ね、その上に頤を載せて深い溜息を吐いた。

Y君は一時間もそんな風にじつとしていた。スクリーンやエハガキの上に空しい想いをのらせているのに比べれば、遣る瀬なさなり不安なり、はるかに本物らしい恋慕の情がはげしく胸をふくらませるのであつた。直に水の上の日ざしが薄れて、松の梢に夕風が鳴つた。やがて、カタンと窓の開く音がした。Y君はとても真面まともに家を見上げる勇氣がなかつたので、池の中を覗き込んだ。日覆を取り外しているらしい白い顔が小さく揺いでいた。Y君は軍服の背中じゆうを硬わばらせた。窓のその白い顔は、ちよつとY君の方を見ただけで、すぐまた奥へ隠れてしまった。犬を呼んでいる男の子の声があった。しばらくすると、二階でピアノが鳴り初めた。チャイコフスキイのバルカレである……

Y君は、それからまた一時間も、じつとそのまま動かずにいた。

もうすつかり夜になった。

やさしい窓に薔薇色の灯がついた。

そして薄いレースの窓帷カーテンを時々優雅な人影が横切った。

公園にはアーク・ライトがともった。夜の女の群れが、その中を近づいて来た。

『ちよいと、意気な龍騎兵の士官さん。あたし未だやつと十三になったばかりなのよ——』
と、抜け落ちてしまつて一つかみにも足りない髪を、大きな鶉色のリボンで結んだ女が云つた。

Y君は、そこで、もうこちらの姿を見咎められるおそれもなかったので、威勢よく立ち上がつて、窓に向つて別れの敬礼をすると、剣と拍車とを鳴らしながら帰つて行つた。：

Y君の休日の日課があらためられた。恋しい人の映画が掛っている時なら、それを見に行くことは云う迄もないが、それは必ず昼の中に切り上げて、夕方からは彼女の住居をよそながら眺めるために、公園へ散歩することにきめた。

久しいことこの習慣が根気よく保たれた。

雨降りの休み日が二十一度、その中六度は外套を透して、長靴の中へ流れ込む程の豪雨であった。そんな時には、無論窓にいかめしい目かくしが下りていた。

霧のために窓の灯が見別け難かったことが十三度。

風のあまり吹かない地方なのだが、それでも池の水が波立って、四辺の景色を映さなかつた日が一ダース。

散歩季節の夕月の美しい時分には、沢山の散歩者から自分をあきらかにするために、ハ―モニカではやりうた時花節などを奏した。(ハ―モニカにかけては、Y君は隊内随一の名手であった)

愛情の故には、どんな大胆な振舞いに出ようと、たとえ恋人の家の扉の前に寝ようと、恥にもならぬし、また咎められるようなこともない。すべて恋をする者の行為には、一種優美な趣が加っているものである。――Y君もまたプラトオンの「シンボジュウム饗宴」を愛読した折があつて、パウサニアスの愛の論議に信頼していたので、容易に勇気を挫かなかつた。ただ雨よりも霧よりも一番Y君を閉口させたのは、例の夜の女の群れであつた。殆んど天上なるものへの思慕の如く一途に汚れなきこの恋の精進を、みにくい悪魔の誘惑にさまた邪げられることが堪えられなかつた。Y君は、何時でも、彼女たちの当のないあぶれた足音が

歩道の上を近寄つて来ると、整石に唾をはきつけて退却した。

ところが、その運命的な休みの一日、未だそんなに遅くない刻限で、ようやく暮れなずんだ水の色を見つめながら、Y君は池の縁の柔らかい草むらに足を投げ出していた。すると、だしぬけに、そつとY君の両肩につかまった者があつた。振向いて見ると、一目でそれと判るような、小綺麗なエプロンを胸にかけた可愛らしい女中が、悲しそうな顔に何か訴えたいような風情を示しているのであつた。

『どうなすつたのですか、お嬢さん?』と恋の修道士は訊ねた。

『あなた、あなた、あなたは、まさか、この池に身を投げて、お果なさるおつもりではないでしょうね?』と娘は、吃りながら云うのであつた。

『さあ?』とY君は訊き返した。

『あなたは、きつと、此処の——』と娘は悲劇女優の家の方を指さしながら、『此処の邸の者に恋をしていらつしやるのですわね。いいえ、もう、すっかり存じて居りますわ。それに、その事がいけなかつたなんぞとは、ちつとも未だ申し上げませんもの。決して、御心配なさるには及びません。』

『いや、僕は、そ、それでも——』

Y君は我にもなく面喰ってしまったのである。

『さ、どうぞ、はつきり仰有つて下さいまし。こんなに長い月日の間、あなたが恋こがれていらした女は、此処の家の誰なのですか？』

『あなたは、何だつて、そんな莫迦な物の訊き方をなさるのです？』

『莫迦なですつて？ まあ、飛んでもない。妾は、あなたのその飛びはなれた執心のお蔭で、この邸をたつた今追い出されたばかりなのですからね。』

『いやはや、どうも、僕には信じ兼ねます。』

『お解りにならないのですか？ つまり、こうなのです。——あなたを一番初めに見付けたのは、お嬢さまなのです。御存知でしょうね、世界中でレデレルの相手役をして見劣りがしないのは、家のお嬢さまたった一人だと云うんですからね。お嬢さまは何度も何度も休み日にはきまつて、あなたが同じような恰好で此処のところに坐つていらつしやるのを見かけたのです。お嬢さまは、間もなくお覚りになりました。そして或る日爺やさんに

「あの兵隊の襟章を見て来ておくれ」と云いつけたのです。爺やさんが橙色だと云うことを確めて来ると、お嬢さまは「第三十騎兵連隊の下士だわねえ。龍騎兵の将校さんでもあれば、ともかく——屹度、家の女中に恋しているのに違いない」と仰有いました。それ

から、女中達がみんな一人一人きびしい吟味を受けたのですけど、誰も名告って出る者が
ないのです。お嬢さまは、誰よりも一番妾を疑いました。それと云うのは、他の女中達は
みんな不器量で、見初められそうなのは一人もいかなかったからですわ。でももとより妾自
身の方には少しも覚えのないことだし、妾はあくまでも知らないと頑張り通しました。す
ると、お嬢さまは、相手が縦令たとえどんなに取るに足らなそうな男でも、そのひたむきな純潔
な愛は天地にかけ更えもない優美な貴いものだ——その愛情にほだされない様な女は永遠
に真実の愛に祝福される機会を取り逃がす不幸な女だ、と仰有って、しまいには泪さえ
流して、あなたのために弁護なさいました。そして、挙句の果に大そう御機嫌を害ねて、
到頭今日限り妾はお払い箱になってしまったのです。人の情を知らない冷酷な女だって…
…妾、一体、どうすればよろしいのでしょうか。……』

『どうするって……』
Y君は、恥かしさのあまり、本当にこの女中の見ている前で、池の中へ飛び込んでしま
いたい程だった。

『ですから、あなたが、やつぱり恋をなすっていらっしやるのが事実なら、その相手をは
つきり仰有って頂き度いのですわ。殿方からそんなに強く愛されることが、どんなに幸せ

か、そりやあ、妾にしたって解り過ぎる程解って居ますわ。でも、何しろ、肝心な妾の方にはそんな心当りはちつともないので、ひよつとそんな闇雲な己惚れを出して、それこそ如何な辛い恥をかかなければならないかも知れないし。……それに、お嬢さまは、ああ仰有るものの、下士官が天下の名女優に恋をしていけない道理もありませんわ。』

『いやいや、飛んでもない。そんな大それた願いを、どうして僕が抱くものでしょうか。は、は、は、は……』Y君は、自分がみじめなピエロに過ぎないことを感じた。

『それでは、まさか——』娘は眼を瞠った。

『そうです、野菊のように可愛らしい娘さん。僕の想いを寄せる女が、貴女の外にあつて堪まるものですか！ 神かけて、嘘ではありませんよ、僕のベアトリイチエ。……ごめんなさい。何てお呼びすればよろしいのでしょうか？』

『そうよ。ベアトリイチエ。……でも、あなた、どうして妾を知っているの？』

娘は白々とアーク・ライトに濡れながら、不意に泪ぐんだ。

『初め、あなたが、窓の日覆いを外そうとしていたところを、偶然通りすがって、見そめてしまったのですよ。僕は直ぐ夢中になる性分なんです。僕は毎晩のように、あなたの夢を見て、あなたの名を——「僕のいとしい女中さん」と寝言に呼んで、隊中の者から^{から}擲^かわ

れました。……』Y君は、そんな風に云いながら、娘の肩に腕を廻した。

娘は鳥渡の間、傍を向いて、まるでひどく気を悪くでもしたかのような表情を浮かべたが、直ぐに肩をゆすぶらして晒わらった。

『窓の日覆いを外していたの？ それ、ほんとに妾だったこと？ 人違いじゃなくって？ 大丈夫？』

『間違いあるもんですか。それから、僕は、あなたが、裏木戸のところで犬を呼んでいるのを見かけたことだつてあるんですぜ。』

『まあ！——嬉しいわ。』

二人はそこで接吻をした。

例の辻君たちが通りかかったが、恋人同志だと気付くと、エヘン！ と咳払いを浴せながら行き過ぎた。

二人は立ち上がった。

『妾の伯母さんの家へ行きましょう。何時でも帰れるように、妾のお部屋が別にあるの。ちつとも気兼ねなんか要らないわ。』

『たった今約束したばかりで、もうそんな真似をしてもいいのかしら——』Y君は遠にび

つくりした。

『なあに？ 誰がお泊んなさいって云つて？ ——可笑しい人ねえ。でも、大丈夫。泊めて上げてよ。』

Y君と娘は楽しく腕を組み合わせながら、公園を抜けると、空車を拾って乗った。伯母さんの家と云うのは、暗い山の手町にある下等な下宿屋の一軒だった。その狭い階段を娘に手を引かれながら上がる時、上の方から降りて来た病氣持ちらしい醜い大年増が、すれ違いざまに娘の耳を引っぱって笑った。Y君はその女が、公園で最初の夜に、自分に云い寄った鶺鴒色のリボンの女に似ているような気がしてならなかった。

『伯母さん？』

『ええ、そう——』

Y君はいきなり娘の手をふりもぎつて、戸外へ走り出し度くなったのを漸く我慢した。方々の扉の隙間から、風体の悪い下宿人共が羨ましそうにY君を眺めていた。

『ベアトリイチェや、帳場へ行つて電話をかけて来ておくれ。』とY君は突然思い付いたように云った。

『中央区、二千七百九〇番——お嬢さんにお休みなさいまし、とね。それだけで、いいん

だよ。』

『あら、お安くないわね。何処のお嬢さん？』

『君なんか知る必要のない人さ。とにかく、それだけ取次いでくれたまえ。こちらの名は、ピアノの先生でも医者でも撮影所の小使でも何でもいい。……』

Y君は、娘が出て行ってしまおうと、さて寝台の上に引っくり返って、ありったけ大声で笑ってみた。

それから、鏡台の上の酒を掴んで、幾杯も幾杯も立てつづけに祝盃を上げた。青春との別れのために……

翌朝。

軍服にブラシをかけてくれる女にY君はきいた。

『一体、いくら上げればいいのだろうね？』

すると、女は嬉しそうに微笑してみせた。

『いいえ、いくらでもないの。——あなたを口説き落すことは、もう永いこと、あたしたちの賭けだったんですもの。……』

Y君は、併し、幾許も入ってはいなかったが紙入れごと、彼女の手の中に握らせて帰った。

Y君は、それから間もなく、小さい時から知り合いの、帽子工場に働いている娘と結婚して、最も善良な夫になったと云う。

青空文庫情報

底本：「アンドロギユノスの裔」 薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「新青年」1929年8月

入力：森下祐行

校正：もりみつじゅんじ

2001年10月30日公開

2007年10月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アンドロギュノスの裔

渡辺温

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>